シーン４

「あらぁ？　司祭君、こんな時間に礼拝堂でお祈り？　ふふふっ♡　真面目だねぇ」

「ん～？　あたしの恰好、何か変かなぁ？」

「……ふふふっ♡　変わってないよ？　あたしはあたし。ただ、分かっちゃったの♡　神様の祝福を、みんなに広めるのがあたしの使命だって……ふふふっ♡　これも、司祭君のおかげなんだよ？」

「……見て、司祭君……これが、今の、あたし……♡」

「砦の外で、悪魔の娘に傷をつけられたこと、あったでしょう？」

「あれね……新しい、神の祝福だったの……ふふっ♡　ふたなりの加護を貰ったおかげで……」

「あたしは、悪魔になったんだよぉ♡」

「ふふふ、ふふふふっ♡」

「あたしはもう、人間じゃなくなったけど……そんなことはもうどうでもいいことなんだよ♡」

「もっとよく見て、司祭君♡」

「このふたなりチンポ……♡　キミのアナルをジュボジュボした素敵なおちんぽだよ♡」

「ふふふっ♡　キミにも祝福を、あげるね♡」

「どうしたの？　司祭君♡　……あぁ、動けなくなっちゃったのが怖かったのかな？」

「大丈夫、キミは何も気にしなくていいんだよ♡　そのまま、あたしと……このおちんぽを受け入れてくれればいいんだから♡」

「さぁ……神に祈ろう……♡　ふふふっ♡　見てみて……司祭君♡」

「これが、キミを祝福してくれるおちんぽだよ♡」

「今までも、いっぱい祝福してあげてたから、分かってるよね？」
「ふふふっ♡　さぁ、キスをして♡　ほら、早く……　んふっ♡」
「……　んっ♡　あっ♡　司祭君の唇、やわらかいねぇ♡　んっ……　あぁっ……　ふぅっ、ふぅっ……　んっ♡」
「はぁっ……　はぁっ……　もっと、いっぱい……　してよぉ……♡　んっ……　はぁ……」
「はぁっ……　はぁっ……　はぁっ……　はぁっ……　んっ♡　あぁっ……　んっ、くぅっ……　はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……　んんっ♡」
「もっと、気持ちよく、して……　んっ、はぁっ…　あぁ、もうっ、我慢、できないっ！」
「ごめんねっ♡　司祭君っ……♡　おちんぽ、入れちゃうねぇっ♡　んっ、んんんぅぅっ！♡」
「あぁっ♡　これっ、きもちっ……　ひぐっ♡　気持ちいいっ♡　んんっ♡　司祭君の、お口の中ぁっ♡　気持ちいいっ！」
「温かくて、柔らかく締め付ける感じ……　すごいよぉ♡」
「おぅんっ♡　はぁ、はぁ、舌で押し返そうと、してるのかなぁ？　んぅっ♡　それぇ、おちんぽの先、グリグリしてるだけだからぁ♡」
「んぅっ♡　おちんぽが、すっごく、気持ちよくなっちゃうよぉ……♡　んぅっ♡　はぁ、はぁ、はぁ、んんぅっ♡」
「体は動かないのにねぇ……　ふふふっ♡　それじゃ、もっと奥まで、入れていくねぇ♡」
「んんんぅぅっ♡　あっ♡　あぁっ♡　あぅっ♡　これっ、気持ちいいっ♡　さっきよりもっ、全然っ、すごいよぉっ♡」

「奥の方まで突っ込むとっ……んぐっ♡　すっごく、締まるよぉっ♡　おちんぽの先っちょ、キュウキュウって締め付けられてて♡」
「んんっ♡　これっ、好きぃっ♡　はぁはぁっ、んんっ♡」
「もっと、いっぱい動いてあげるねぇっ♡　んんっ！　あぁっ♡　すっごいぃっ♡」
「司祭君っ♡　全部おちんぽ、飲み込めて、偉いねぇ♡　んんぅっ……♡　はぁはぁっ、んぁっ♡」
「あぅっ♡　んんっ♡　はぁぁっ、んぐっ♡　あぁっ♡　これっ、いいっ♡　すっごくっ、いいよぉっ♡」
「おぅんっ♡　はぁはぁっ、おちんぽっ、気持ちいいっ♡　司祭君の口マンコっ♡　さいっこうだよぉっ♡　んんぅっ♡」
「動かしていくとっ……んんぅっ♡　おちんぽがっ、ゴリュゴリュって、押しつぶされてっ、気持ちいいっ♡」
「んんっ♡　あっ♡　あっ♡　あぅっ♡　んぐぅっ♡　んぁっ♡　はぁはぁっ♡　あぅっ♡　これっ♡　好きっ♡　好きぃっ♡」
「アナルも、いいけどぉっ♡　んんぅっ♡　喉マンコもっ♡　締まって、気持ちいいよっ♡　司祭君っ♡　はぁはぁっ♡」

「苦しい？　ふふふっ♡　そんなこととないよね？　んぅっ♡　喉の奥、犯されて……あうっ♡　気持ちいいよね？　んぅっ♡」
「これは祝福なんだからっ♡　はぁ、んんっ♡　司祭君の体ぁ、たっくさん、犯して、犯して、犯してぇ♡　あげるんだからぁ♡」
「あぁっ♡　気持ちいいっ♡　気持ちいいっ♡　この口マンコ気持ちいいよぉっ♡　おちんぽっ、止まらないのっ♡」

「もっとっ♡　もっとっ♡　もっと締め付けてっ♡　んぐぅっ♡　司祭君♡　ほらぁっ♡
もっと、おちんぽ、締め付けるのぉっ♡」
「んっ、んぐぅっ♡　あっ、あぅっ……んぉっ♡　んっ、んぅぅっ♡　はぁはぁっ、はぁ
はぁっ、んんっ♡」
「あっ、あぐっ♡　んんぅっ♡　感謝ぁ、しますぅっ♡　神様ぁっ♡　んんっ♡」
「これもっ、あたしを導いてくれた、神様の、おかげですっ……んぅっ♡」
「祝福をっ……加護を授けてくださりっ、ありがとうございますぅぅっ♡　んはぁっ♡」
「このおちんぽでっ♡　みんなに祝福を、授けて、いきますねぇ……はぁはぁっ……ん
んぅっ♡」
「そして……はぁはぁ、んんぁっ……んはぁ……んっ♡」
「キミにはぁ、特別、濃いものをぉ♡　授けてあげないと♡　あぁっ♡　司祭君♡　よ
かったねぇ♡」
「さぁっ♡　たっぷりと、味わってぇ♡　んんっ♡　おちんぽの祝福ぅっ♡　いっぱいっ、
あげるからぁっ♡」
「んぁっ♡　あぁぁっ♡　もうっ、イくっ、イっちゃうぅっ！　んんんぅっ♡　あぁっ！
あっ！　あぁぁっ！」
「んんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっ！！♡♡」

「はぁっ……んんっ♡　あぁっ♡　いっぱいっ♡　出てるねぇ♡　んふふふっ♡」
「んっくぅっ♡　はぁっ、はぁ、はぁ……ふぅっ……」
「全部は、飲み込み切れなかったぁ？　ほら、あたしによぉく、見せてぇ……♡」
「あぁっ♡　すっごく、いいお顔になったねぇ♡　よだれと精液でドロッドロのとろけた
お顔♡　素敵だよぉ♡」

「ホント、食べちゃいたいくらい♡　ちゅっ、ちゅるるっ、ちゅぷんっ♡　んぁっ……はぁ、はぁ、ふぅっ……♡」
「キミは特別たからねぇ♡　もっと、いっぱい祝福してあげないと、だねぇ♡」
「次は、この前みたいに、アナルにあたしのおちんぽ、突っ込んであげるねぇ♡　はぁはぁ♡」
「ふふふっ♡　ほら、見てみて♡」
「キミのおちんちん、勃ちっぱなしになってるねぇ♡　キミは興奮しちゃってるのかなぁ？　ふふっ♡」
「もう、キミの意思は関係なくなっちゃってるんだよ♡　祝福の効果だね♡」
「アナル犯しながら、キミのおちんちんも一緒にシコシコしてあげるねぇ♡　ふふっ♡」
「きっと、すごーく気持ちいいよ？　よかったねぇ♡」
「あぁっ！♡　いいっ♡　やっぱりっ♡　司祭君のアナルいいよぉっ♡　この前、入れたときよりっ、んぐっ♡」

「すんなり入っちゃったぁっ♡　あぅっ♡　この搾り上げる感覚……最高ぉ♡　んぁっ♡あぁっ♡」
「司祭君のおちんちんもっ、アナルに入れられたらビクンって跳ねながらっ、んんっ♡精子止まらなくなっちゃったねぇ♡」
「んぐっ♡　あっ♡　あぁっ♡　すっごいっ♡　締まるぅっ♡　んんっ♡　んんぅっ♡あっ♡　あぅぅっ♡」
「尻マンコっ♡　すごいっ♡　気持ちいいっ♡　あぁっ♡　うっ、うぅっ♡　んぐっ♡はぁ、はぁ、はぁ、あっぐぅっ♡」

「あはっ♡　すごいよっ♡　司祭君っ♡　んんっ♡　ズン、ズンって突き上げるたびっ、んっ♡」
「んんっ♡　あぁっ♡　気持ちいいっ♡　ホントにっ、気持ちいいっ♡　んんっ♡　あぁっ♡　すごぉっ♡」
「はぁはぁっ♡　ホントに、司祭君のアナル、最高だよぉ♡　はぁ、はぁ、はぁっ♡」
「すごいねぇ♡　はぁはぁ、んんっ♡　精子、すっごい出てるじゃん♡」
「キミのおちんちんから、精子が出続けてるのっ♡　すごいよぉ♡　んんっ♡　おちんちん、壊れちゃったね♡　ふふふっ♡」
「でも心配しないで♡　シコシコして、全部出してあげるから♡　キミの精子で水たまり作っちゃお♡」
「ドピュドピュってっ……　んんっ♡　もっと出してっ♡　出してっ♡　気持ちよくなろぉっ♡」

「んんっ♡　あぁっ♡　すごいっ♡　すごい締まるよぉっ♡　ビクンビクンってっ♡　んんっ♡　あたしがおちんぽ突き上げるたびっ♡」
「司祭君のアナルが、蠢いてるのっ♡　これっ♡　気持ちいいっ♡　気持ちいいっ♡　んんんぅっ♡」
「んぅっ♡　はぁ、はぁっ……　んぅっ♡　あぁっ、すごいっ、ホント、すごいよぉっ♡　精液、止まらないねぇっ♡」
「ふふっ、ふふふふっ♡　キミの体ぁ、いっぱいあたしの精液注いじゃったからねぇ♡」
「大丈夫、心配、しなくていいよ♡」
「悪魔に堕ちていくのは幸せなことだから♡　んぁっ♡　はぁ、はぁ、ふぅっ♡」
「だからぁ、安心して、あたしに身を任せてくれれば、大丈夫♡」

「司祭君も堕ちよう？　あたしのオナホ穴になってよ♡　ずっと気持ちいいこと、しようよぉ♡」
「ちゅっ♡　はぁ、はぁ、はぁ……んふふっ♡」
「きっとすっごく楽しいよ♡　アナルをジュボジュボされて、ずっと気持ちいいのが続くの♡　最高じゃない？」
「悪魔になっちゃえば、人間の常識なんて通用しないんだからぁ♡」
「ちゅっ、ちゅぅっ、ちゅくっ、ちゅむりゅっ、ちゅぷっ、んっ♡　はぁはぁ、新しい神様は、あたしを素敵な存在にしてくれたの♡」
「だから、今度はぁ、あたしが司祭君のことを、素敵な存在にしてあげたいんだぁ♡」
「新しい神様に、感謝を捧げながらぁ、みんなにいっぱい祝福を授けていこうよ♡　んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅるちゅるっ」
「むちゅりゅっ、ちゅっ、んっ♡　ちゅむちゅむちゅっ、んぅっ♡　ちゅくむりゅっ、ちゅむりゅぅ、ぬちゅむっ、んぉっ♡」
「はぁはぁはぁ、ふふっ♡」
「おちんちんでぇ、気持ちよくなることだけ、考えよぉ？♡」
「とても素敵なことだと思うよね？　おちんちんに従って生きる……あぁ、本当に素敵♡」
「あたしと、ちゅっ♡　一緒にぃ♡　ちゅちゅっ♡　司祭君も、ね？　ちゅぅっ♡　んふっ♡」
「ちゅっちゅっ、ちゅぷっ、んぉっ♡　はぁ、はぁ、はぁ……あたしのオナホ穴に、なってよぉ♡」
「はぁ、はぁ、はぁ……んぅっ♡　ずっと、一緒に、気持ちいいことだけ、していようよぉ♡　んぁっ♡　あぁっ♡」

「んぅっ♡　はぁはぁ、んんっ♡　司祭君の、お尻ぃ♡　ホント気持ちいいっ♡　何回でも出せるよぉ♡」
「はぁはぁっ…んんぅっ♡　あたしと一緒に、ずっとジュボジュボしよぉ♡　んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅくっ……」
「んんっ♡　はぁ、はぁっ……ふふっ♡　アナルがきゅぅって締まったねぇ♡　それに……んんっ♡」
「精子もドバっと一気に出ちゃってない？　ふふっ♡」
「これからのこと、想像して、興奮しちゃったのかなぁ？　いいよぉ♡　ちゅくっ♡」
「キミは気持ちよくなることだけを、考えてればいいんだから……ちゅっ♡　ふふっ、ふふふふっ♡」
「はぁっ、はぁっ、はぁっ、んんっ♡」

「あんまりにも、キミのお尻が気持ちいいからぁっ♡　そろそろ出ちゃいそうな感じなんだけど……んっ♡」
「中に出してほしい？　それとも、外に出して……ぶっかけられたいかなぁ？」
「どっちでも……んっ♡　あたしはいいけど……んぁっ……はぁ、はぁ、はぁ、ふふっ♡」
「やっぱり、どっちにも、祝福してあげるねぇ♡」
「あぁっ♡　ホントにっ、司祭君のアナルっ♡　最高ぉっ♡　もうっ、あたしっ、イっちゃうよぉっ♡　イくっ、イっちゃうっ♡」
「んんっ！　んんんんんんぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっ！！♡♡」
「あっ♡　あぁぁっ♡　まだぁっ♡　出てるぅっ♡　んんっ♡　はぁはぁ、んんっ♡」

「すっごいっ、アナルから、引き抜いてもぉっ……んんぅっ♡　こうやってシコシコしたらっ♡　んんぅっ♡」
「あっ♡　あぁっ♡　まだっ、出るっ♡　精子っ♡　いっぱい、出るのぉっ♡　これっ、気持ちいいっ、気持ちいいっ♡」
「んんっ！　んんんんんぅぅぅっっ！♡♡」

「あぁっ……んんぅっ……はぁっ、はぁっ、はぁっ……んぁっ♡」
「はぁ、はぁ、ふぅっ……ふふふふっ♡」
「あぁ、キミの精液と、あたしの精液が……混ざり合っちゃってるねぇ♡」
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……ふふっ♡」
「これで、中も、外も……キミのこと祝福できたよ……♡　」

「はぁ、はぁ、んっ……あぁ、一緒に堕ちていこうねぇ♡　これでキミも……ふふふっ♡」